

日本人学生のための外国語としての英語教授法

—これまでの研究とこれからの展望—

喜田 慶文

I. 初めに

筆者は大学において英語を学習する日本人に資するために、英語の教授法、学習法に関して調査、研究を行ってきた。しかし、大学での勤務は今年（2017年度）が最後であるので一区切りとして、これを機にこれまでの研究成果の中で、これからも研究を発展させていくべきいくつかの研究項目に関して概略を述べ、これを基にこれからの研究に役立てたいと思う。

これまでの研究は主に英語リスニング能力に関する教授法（学習法）であったが、ライティング、リーディング、また観光系学生を主に指導してきたことから、観光英語に関する研究も行ってきた。これらの中で主なものは、リスニングでは、リスニング・ストラテジーに関する研究（喜田：'2009, 2015）、リスニングの能力向上に必要な要素の聞き取りに関する研究（ibid.：2013, 2016）、英語のディクテーションに関する研究（ibid.：2004, 2010）などがある。日本語とは音声体系の異なる英語音声を理解するために必要な聞き取りに関する方法論は専門的に、あるいは根拠の示されていない都市伝説的に、数々述べられているが（例えば英語音声の大量の聞き流し、シャドーイング、音声発話の繰り返し、音読、等）、ある一定以上の聞き取り能力の養成ができていない時点ではほとんど効果が期待できなかった。喜田のこれまでの研究では、他のスキル（語彙力、リーディング、文法能力）はあるが、音声認知能力に欠ける学習者に唯一効果が見られたのは英語のディクテーションであった。研究書ではないが、留学を志す人達のために TOEFL テスト用のリスニング問題は版を重ねて第4版を発行した（ibid.：2014）。この参考書では学生だけではなく、一般の英語学習を対象とし、リスニング学習の方法も提示した。

ライティングの研究では、日英両語の表現及び言語で表現する場合の意識のずれによる問題点が明らかになった（ibid.：2017）。主な原因は日本語からの直訳を英語にした場合、英文として非文法（意味的、文法的、またはその両方）になるのであるが、調査対象となった日本人学生はその不備を顧みることができないようであった。

また、リスニングを含めて、英語学習全体の能力を向上させるには最も重要な要因となるのが学習動機である。調査（ibid.：2008）では内〔主観〕的動機（英語が好き、英語圏の文化、コミュニケーションへの興味、等）より外〔客観〕的動機（海外留学、難易度の高い試験、例えば、TOEFL、TOEIC 等、が直近にある〔あった〕）の方がより学習効果が高いことが示された。

語法研究では類義語の「～のようだ」（ibid.：'98）、英語の類義語「旅行」の定義（ibid.：'99）、また JACET SIG の語法研究会において、日本人学生のための、句動詞（矢田、喜田、他：2004）、

日英表現の比較 (ibid : 2017) の研究・出版を行った。その他、観光英語に関しては、英語の類義語「旅行」の定義に関して (ibid : '99)、語の意味の違いによる用法の研究を行い、また語彙学習法に関して、一般人を対象に「TOEFL 基礎単語」(ibid : '93) を出版した。

次章以下は、リスニング・ストラテジー、リスニングの能力向上に必要な要素の聞き取り、英語のディクテーション、ライティング、学習動機、類義語について、これまでの研究概要とこれからの研究方向に関して述べたい。

II. リスニング・ストラテジー

1) 喜田 : 2009 『日本人学生の英語音声認識・意味理解の方法に関する一考察 ーリスニングストラテジー使用の観点からー』

喜田 (2009) は日本人大学1年次生-中級英語学習者 (TOEIC 450点レベル) を対象に音声認識、意味理解のストラテジー、また、そのストラテジー使用において、有効なストラテジーの使用を限定的にしている要因を明らかにすることを目的に実験を行った。この実験では音声認識率と意味理解の差異と相関性、音声認識から意味理解に至るためのストラテジーを調査した。実験参加者は30名、調査した標本数は $n=600$ であった。音声認識から意味理解に至ったのは約半分の52%で音声認識率と意味理解率の相関係数は $0.5 [p<.01]$ で、正の相関であった。

音声認識から意味決定にいたるストラテジーの多くは「直訳」と「削除」であった。聞き取った音声情報から、自分の持っている言語知識に照らし合わせてより適切な意味理解をするようなストラテジーを使用するのは容易ではなく、したがって、認識した音声をそのまま、語句ごとの直訳を行っている。また直訳や聞き取った音声から同定した語句の意味が文全体の意味と整合性を保たない場合、他の(意味の)候補を選択するのではなく「削除」して文の意味の矛盾を避けるストラテジーをとっていた。

音声認識が完全にできない場合も母語話者であれば、持っている言語知識などの、利用できる情報を使って原文の意味が理解できるので、音声認識率よりも意味理解率が高くなる。しかし、日本人中級英語学習者は、音声の欠けた部分を自分の持っている言語知識で埋めていくようなストラテジーは難易度が高い。特に文の意味決定に重要な「内容語」が聞き取れない場合、目標言語の知識と経験が十分でない学習者には、残りの音韻情報や他の利用できる情報から原文を復元するためのストラテジーはほとんど使えないことが示唆された。

2) 喜田 : 2015 『英語音声聞き取りと意味理解に関する一考察 ー観光通訳技法受講生の用いるストラテジーからー』

さらに、喜田 (2015) では、観光通訳を目指す学生を対象に、1) 前回 (ibid : 2009) の調査で明らかにした「音声認識から意味理解にいたるためのより効果的なストラテジー」について他の新たな要因をさぐり、2) 英語音声意味把握から、日本語へのトランスレーションに至るのにどのような障害があり、どのようなストラテジーを使用しているか、また使用しているストラテジーは有効か、について調査を進めた。実験参加者は観光通訳技法を受講している観光系学生29名、実験

はディクテーションとトランスレーションの課題を課し、ディクテーションは短文10問（各文4語-9音節から17語-26音節）、英文から日本文へのトランスレーションは12センテンスから成る長文で10パートに分けた（8語-11音節から28語-41音節）。

ディクテーション〔短文〕では音声認識率と意味理解率との相関分析から、文にはその意味理解において他のセグメントと比較してより重要なセグメントが存在することが示唆された。したがって、文の音声認識から意味理解に至るには発話された音声は全体ではなく、重要な部分に集中する戦略が有効であると考えられるが、実験では意味理解に重要度の高いセグメントと重要度の低いセグメントの音声認識率に有意差はみられなかった。

トランスレーション〔長文〕では文の長さ（音節数）とトランスレーション成功度（翻訳率評価付け）については中程度の負の相関性が見られた〔 -0.753 ($P < 0.012$)〕。このことは文が長くなればなるほど、翻訳の成功率が低くなることを示しているが、この理由の大きな要因として考えられるのがワーキングメモリ容量の問題である。この容量に負荷をかけるのは集中すべき該当文の長さだけではない。先行する文の処理の未完遂により、当該文への集中力、処理時間の確保が阻害される。また未知語による阻害要因も少なくはない。文の意味全体と矛盾しない意味を模索し、成功しなかった場合、または文の意味に決定的ダメージを与えない場合は削除（喜田：2009）を行う。しかしこの処理には時間とトランスレーションの成功度にダメージを与えることになる。文法／用法の運用能力不足により、少し複雑な文は時間がかかるため単純な構造に置き換えて処理するため原文の意味を正確にはほとんど伝えられなくしている。トランスレーションで使用される戦略は前回（喜田：2009）の「直訳」と「削除」に加えて、未知語や認識できなかった音声は「近接する音声」例えば、keen を key と表記、或いは、カタカナでの音声表記（無意味の場合が多い）の使用が見られた。さらに、一部しか音声認識ができない場合は、聞き取れた断片から「make-up」し、文の整合性をとっていた。しかし、この方法は文の原義を伝えることには失敗している。

3) 喜田：2003（リスニング・ストラテジー補足）

ピンカー（p. 252）¹によると、予測がある程度あたっていれば、音声解析はかなり雑でいい。音波から伝わらないことは意味内容が補足してくれる。たとえば、動物の生息環境が破壊されるということが議論の対象になるとしたら…「イーズ」としか聞き取れなくても、「種 (species)」と正しく理解できる、としている。

この「予測」を高める一方法として、英文対話文を聞き取る際に「対話場面の状況に関する情報」が与えられれば聞き取り率は向上することが予測されるとして、調査対象者20名に対して実験を行った。テスト問題はA、Bのグループに対して、各20問題を使用し、2回のテストを行い、第1回目のテストはグループA、B同じ条件で、第2回はグループAには対話場面に関する説明を日本文にて付し、グループBには与えず第1回と同じものを繰り返した。第2回のテストで、場面情報を与えたグループAでは第1回テストより成績が34%上昇し、与えなかったグループBでは14%であった。情報を与えたグループAの上昇率はグループBの約2.5倍の効果があったと考えられる。「対話場面に関する情報」は英語聴解力向上の一助として効果のあることが確認できたが、「対話場面に関する情報」の形式、またこれが言語で与える場合には適切な文言が不可欠であること、は確認できた。しかしそれはどのようにして達せられるか、等に関してはさらなる調査が必要である。

Ⅲ. 英語リスニング・ディクテーション研究

リスニング研究

リスニング研究は他の能力と関係づけて行ってきた。喜田（2013）ではリスニング能力と語彙力の関係性について調査した。

1) 喜田：2013 「日本人学生の英語リスニング能力に関する一考察」

語彙力とリスニング能力の相関性に関して、大学新入生のスクリーニングテスト（ $n=237$ ）で TOEIC スコア 505 点～780 点を獲得した調査協力者 26 名を対象に語彙テスト、質問紙調査を行った。その結果を分析し、この中から、英語圏滞在 5 年以上の帰国子女、および、語彙の学習、関心に対する無回答であった 3 名を除く 18 名を対象とした。テストは TOEFL で公開されている語彙テストのパート 30 題を使用し、質問紙調査で「語彙学習に力を入れて取り組んだ」と回答した 8 名をグループ 1、「少しは力を入れた」、「あまり力を入れなかった」と回答した 10 名をグループ 2 とした。調査協力者 18 名の TOEIC テストスコアの平均値は 566 点で全体（ $n=237$ ）の平均値 386 点を大きく上回っている。

グループ 1 とグループ 2 の語彙、リスニング、リーディングの得点の平均に関して t 検定を行ったが両グループ間に有意差は認められなかった。また両グループとも語彙とリスニング、リスニングとリーディングの成績に有意な相関性はみられなかった。しかし、語彙とリスニングについては、「語彙学習に力を入れて取り組んだ」と回答したグループ 1 のみ語彙とリスニングの成績に高い相関性が見られた（相関係数：0.822 [$P<0.012$])。

語彙学習を意識的に行っている群では、そうでない群と比較して、語彙テストの平均値に有意差が認められなかったにもかかわらず、語彙とリスニングの成績に高い相関性が見られた。このことにより、適正なレベルの語彙学習はリスニング能力向上に一要因となっていることが予想された。したがって、リスニング指導には適切な語彙学習指導も併せて行うことが必要である。

ディクテーション

2) 喜田：2004-2 「ディクテーションのリスニング技能向上に及ぼす効果について」

喜田（2004-1）から日本人英語学習者が音声知覚能力獲得を可能にするのには：(1) まとまった音節を聞き取る、(2) 意味の付随した音節を聞き取るため、単語ではなく、センテンスを聞き取る、(3) ワーキングメモリーの容量の制限から、 7 ± 2 音節（またはチャンク＝項目）を超えない言語材料の使用、(4) リスニング学習では能動的で分析的な作業が必要、等の条件が示された。

この条件をクリアし、日本人英語学習者に対して実効の上がるリスニング訓練方法として、喜田（2004-2）では以下のような方法でのディクテーションが有効であると推測した：(1) perceptual sense unit（チャンク） 7 ± 2 音節以下の長さとなっているセンテンス、ただし、学習者が目で読めば理解できるもの、を使用する、(2) 一度で聞き取れないときは 2 度繰り返して聞く（しかし 2 回までとする）、(3) スクリプトで文字を確認した後で音声から意味がイメージできるようになるまで繰り返し聞く、(4) 意味がイメージできるようになれば頭の中で復唱する。

実験は大学1年生、英語中級学習者（英検2級以上、あるいはTOEIC 450点以上と推測される）30名を対象にテスト問題はTOEFL既出の短文20題を使用し、実験群5名と統制群25名に分け、pre-testとpost-testの2回のテストを行い分析した（pre-test、post-testは同一問題）。pre-test後に実験群には上記（1）～（4）に沿ったメソッド（詳細は省略）で1日30分、2週間学習するよう指示した。結果－pre-testとpost-testの差（成績の上昇率）－はTOEFLリスニングの成績換算で統制群では、460点レベルから470点レベルへと少し上昇した。実験群では480点レベルから520点（米国の大学への留学が可能）レベルへと大きく上昇した。実験群の、わずか2週間、トータル約5時間の学習でのこの成績上昇率は、本研究者の長年のTOEFL指導の経験から、これを達成するには6か月以上のTOEFL講座の受講と自宅学習を必要とする数字である。

3) 喜田：2010 「英語リスニング指導法としてディクテーションの有効性に関する一考察」

喜田：2010では、ディクテーションはTOEFL Listening学習に有効でないことはないという仮説を立て、検証した。

M. Rost (Rost: 2002) は、ヒアリングとリスニングの違いについて、両方とも音声認識に深く関わるものであるが、*intention* の度合いにおいて (Rost: p.8)、異なっているとしている。この*intention* の度合いを高めるにはまず意識を目的物（発話）に向ける注意、*attention*、が必要になるが、*attention* は、インプットをモニターするのに必要なだけでなくメッセージを有効に格納し再生するためにも必要 (Rost: p.8) である。さらに、*attention* は3つの神経学的要因を必要とする時間的経過として考えられる、すなわち、喚起、位置づけ、集中 (Rost: p.12) であるとしている。

上で述べているようにリスニングの定義は一つではないが、リスニングに必要なのはまず*intention* であり、*attention* であろうと考えられる。しかしながら、音声英語が十分に聞き取れない学習者に「意図と集中力」を持って英語音声聞き、意味を取るよう指導したとしても、問題は どうすれば「意図と集中力」をもって英文を聞くことが出来るか、ということである。

この「意図と集中力」を持って英文を聞く1つの方法として、ディクテーションが考えられる。ディクテーションとは、発話の流れを分け、聞こえたものを書きとることは…意味を理解すること、すなわち（ある意味では与えられた）言語の文脈を、（推論されねばならない）言語外の文脈に関連付けることを要求する (Amato: p.366) のである。ディクテーションを行うには、音声を聞こうとする強い「意図」が必要であり、また聞いた音声の細部まで再生する必要があるため、細心の注意を向けざるを得ない。

喜田 (2010) では、大学1年生21名を対象に8名を実験群とし、13名を統制群として、TOEFL既出のshort-dialogue 30題を使用し、pre-testを行った。pre-testの結果は統制群、実験群ともにTOEFL PBT換算で360点レベルであった。TOEFL PBTでは450点以上でないと英語力が測れないとされているので、統制群、実験群ともにTOEFL Listeningを受験できるレベルにないことがわかる。

pre-test後、実験群には2週間で1回につき各30分のディクテーション指導を5回行った。これと並行してディクテーション用の音声教材を被験者に与え、2週間後のpost-testまでに1日30分のディクテーション学習を12回行うよう指示した。

pre-test から2週間後に post-test を行った。テスト結果は、統制群では pre-test と post-test の結果の差異に関して有意差はみられなかった ($T: 0.38, P < 0.71$)。すなわち、この群では2週間でリスニング力に変化はみられなかった。実験群では TOEFL PBT 換算で450点レベル (TOEFL Listening を受験できるレベル) に上昇し、2つのテスト結果に有意差が見られた ($T: 2.47, P < 0.044$)。すなわち、実験群では2週間の学習における、リスニング能力の伸び率に被験者間での差異が見られたものの、TOEFL Listening のスコア向上に効果があることが示された。これにより、ディクテーションは TOEFL Listening 学習に有効でない の仮説は棄却され、有効であることが証明されが、一方では、ある一定以上のリスニング力のある学習者でなければ、ここで実験した TOEFL リスニング力を伸ばすためのディクテーション効果はあまり期待できないのではないかと考えられた。

4) 喜田：2016 「日本人学生の英語聞き取りに関する一考察

一文の意味理解に必要な重要語句の聞き取りに関して」

喜田の2016年の調査では、英語を専攻としない日本人大学生の中級英語学習者 (TOEIC 545点~475点) を対象に短文を使用してディクテーション及び意味理解のテストを行い、聞き取ったセンテンスの意味理解に他の語句よりも重要な語句の同定率、と英文の聞き取り率の分析、考察を行った。

聞き取り率と発話時間の長さとの相関関係では、文が長くなるほど意味理解が難しくなると予想できるが、今回の実験では語数と意味理解との間には有意な相関性はみられなかった。今回も文が長くなれば聞き取り率は少し下がる傾向にあったが、有意な相関性が見られたのは文における重要語句の意味把握との関係において (聞き取り率と重要語句認知の相関係数は $[0.86 : [P > 0.00]]$) であった。当然ではあるが、文の理解度は文中の重要語句認知が大きく影響していることがうかがえる。

ここで行った短文の聞き取りでは発話の長さは (語数、発話時間) は意味理解にあまり影響はないが、聞き取り率の低かった文の分析ではその阻害要因として、文中の複数の重要語句、否定形、分数表現、長い名詞句、等が見られた。

尚、この調査では音声聞き取り率と意味理解の間に負の相関性が見られた。すなわち文の意味を日本語で表記させた方が、英文で書きとった文の意味を解釈したものより、より意味の認識率が高いという分析であった。

この結果は、喜田 (2010) の “音声認識から意味理解に至ったのは…52%でしかなかった” に合致しない。これは実験方法が影響を与えたと考えられる。最初のテストでは英文を聞き取り、その意味を日本語で書くのであるが、この場合は聞き取れたところから意味を想像すればよい、すなわちワーキングメモリにキャパシティー以上の負荷はかからない、しかし、英文 Dictation では英文を正確に書く必要があり、したがって英文そのものを細部に至り記憶にとどめておく必要があり、さらに英文に関する知識、文法、語法などの知識等も不十分であり、これらを行うにはワーキングメモリのキャパシティーをはるかに超える負荷がかかったこと等、が原因であろうと考えられた。

5) 英語リスニング・ディクテーションの研究の展望

リスニング能力向上のための基礎力養成手段としてディクテーションの有用性を調査してきた。M. Rost (Rost : 2002) によれば、listening とは一般的には以下の4つの異なった定義が考えられるとしている：1 receptive; 2 constructive; 3 collaborative; 4 transformative. すなわち、

1. 話者が実際に行ったことを受け取ること、
2. 意味を構築し提示すること、
3. 話者と意味の決定を交渉し、反応すること、
4. 深いかかわり、創造、共感を通じて意味を想像すること、

である。

上記の作業がリスニングであるが、その作業を行うための前提として音声認識 – perception が不可欠である。ディクテーションは母語（日本語）と異なる音声システムを持つ外国語（英語）音声認識力を向上させる訓練の一手段である。外国語のリスニングにおいてまず、音声を聞く意図が最初に必要であるが、日本語と異なる音声体系の英語の音声認識には、自動化された母語（日本語）音声認識とは異なり、高度な意識を目的物（英語音声による発話）に向けなければ – 高度な意識の集中がなければ – perception に達するのは困難である。喜田（2010）で指摘したように、問題はあまり英語音声に慣れていない時期に：

“どうすれば意図と高度な意識の集中力をもって英文を聞くことが出来るか”

である。

この「意図と集中力」をもって英文を聞く1つの方法がディクテーションである。

上記2回の調査でディクテーション学習はリスニング能力向上に有効であることがある程度証明できたが、その可能性と、検証結果の信頼度においてさらなる調査、研究が必要である。今後の調査・研究の方向性として：

1. 十分に信頼できるサンプル数 ($n > 500$) の確保、
2. ディクテーションメソッドの細部の検証、
 - ①ディクテーション学習方式はどのレベルの英語学習者に対しても有効なのか、
 - ②もし、有効だとして、どのレベルにどのような教材が有効であるのか、
 - ③語法・文法知識、語彙力、発音、等に加え、外部世界の知識、等の関係からの調査も必要である。
3. ディクテーションメソッドの向上の方法、
等が考えられる。

尚、注意しなければならないことは喜田（2016）で見られたように、実験方法そのものの整合性を多方面から慎重に評価し、実験・検証がなされなければならないことであろう。

IV. 語法・ライティング研究

1) 喜田：1998-2 「類義語 SEEM APPEAR LOOK SOUND について」

喜田(1998-1)では、JACET-SIG 語法研究会で「類義語 SEEM APPEAR LOOK SOUND について、それぞれ、どの語が「どのような統語上の特徴があるのか」によって分類し、その用法、及び意味上の差異を検証した。この成果から、喜田(1998-2)では、先行研究であるオースティン(1964)の SEEM, APPEAR, LOOK の統語上の差異による分類を検証し、取り扱われていなかった SOUND を加えて検証した。

オースティンでは可能な統語上の構造は7分類であり、APPEAR は7分類のうちすべての構文が可能であり、SEEM は6つの構文、LOOK は4つの構文が可能であるとしている。喜田(1998-2)では、辞書、文法書などの一般文献から統語上の可能性があると思われる構文を中心に「The Oxford English Dictionary, Second Edition on Compact Disk」を使用してその Text 検索から「SEEM, APPEAR, LOOK, SOUND (原形、現在形、過去形、過去分詞形)」の使用されている例を調査し、11の構文に分類した。OED で確認されたものは SEEM が10構文可能(OED で、確認されなかった残りの1構文も可能性が高かった(インフォーマント調査による)、APPEAR が10構文(残りの2構文のうち1構文は可能性が高い)、LOOK が5構文、SOUND が4構文であった。

この群の動詞に共通する中心的な概念は「～のようだ」であり、いずれも話者の事物に対する意見、または他人の意見に対する論評を述べるような場合に使用される。意味上、また統語上でも SEEM はこの群の動詞の中心的な語と考えられ、この群の他の語は SEEM の一部、あるいはすべてを含むことにより、グループ化されている。また、SEEM は統語上この群の動詞の中でその用法においてもっとも制限が穏やかで、APPEAR、LOOK、SOUND の可能な構文はすべて可能であると考えられた。

2) 喜田：1999 「英語の類義語〔旅行〕の定義に関して」

観光系学生に ESP (English for Specific Purposes) として観光に関する英語を指導するときに、「旅行」を表す、travel, tour, trip, journey, sightseeing, excursion, 等が現れてくるが、これらの語の意味上、用法上の差異について学習者は困難、あるいは混乱を感じている。その最も大きい原因の一つはこれらの語の定義そのものがアカデミズム、あるいは観光にかかわる公の機関、産業において明確にされていないためでもある。

ここでは、主に「TRAVEL」、「TOUR」、「TRIP」、「SIGHTSEEING」を取り上げ、その意味、用法に関してこれらの語の語源、辞書的意味、公の機関による定義を提示、考察した。

先行研究を見ても「旅行」の類義語はそれを使用する人により、各々その意味が異なっていて、多くの出版物を見ても語の意味が統一されているとはとても考えにくい。

研究は：

- ① (米国の大学の) 教科書で使用されているタームの研究、
- ② 各語の語源・辞書的意味、

③各語の文法的、用法的差異、
に関して調査した。

調査結果は：

- ① TRAVEL は“移動”という行為にその焦点が当てられていて、このグループの各語は TRAVEL の意味の一部、またはすべてを含んでいることによりグループ化できる。
- ② TOUR は移動の目的“結果”にその焦点が当てられている。
- ③ TRIP は「旅行」の意味で使用されるときは、TRAVEL の意味の一部を構成し、行って又、‘同じところに帰って来る’ことにその焦点が当てられている。
- ④ SIGHTSEEING は狭い範囲、特に旅行目的地内の見所を見学するための移動と考えられる。
- ⑤ TRAVEL と TOUR は名詞形、自動詞、他動詞、行為者のすべてを一つの形で意味することが出来る。
- ⑥ TRIP と SIGHTSEEING は TRAVEL や TOUR の補助的な語であり、その用法、意味ともに TRAVEL や TOUR と比較して大きく制限されている。
- ⑦その他として、JOURNEY という語があるが、この語の意味は、‘1日’という意味から1日で移動できる距離を意味し、中世において、通常一日で20マイル移動（特に軍が）できたことによる。

TRAVEL が類義語「旅行」の中心的語であるが、業界や政府の観光政策で重要なのは TOUR である。TOUR は移動の‘目的’、‘結果’に焦点が当てられており、業界や政府の観光政策はこの移動の‘目的’、‘結果’に合わせて立てられているからである。

3) 喜田：2017 「日本人学生の英語作文能力に関する一考察」

日本の大学の教室における適切なアカデミック英文ライティング指導法の調査として、英語を専攻としない日本人大学生 (n=25) の中級英語学習者 (TOEIC スコア 500~700 点程度) を対象に原文 (日本文) を適切な英文にするテストを行った。テスト後にモデル英文 (筆者が英訳し、英語を専門とするネイティブにチェックを受けた) とテストで学生が英訳した英文を比較・分析し、学習者の日本語干渉による英語語法、冠詞、単数/複数、等についての誤り、文章構成能力を調査し、考察した。

結果は：

- ①**非適正語数と word by word の訳** 日本語の単語から英語の単語へと word by word で置き換えた場合、英文の意味が正確には表せない、あるいは誤訳 (違った意味) になってしまう。例えば、
外国語を早い時期に学ぶのは有利であるように思えるが、実際には、たとえ子供たちが早い時期に外国語を学んでも、それほど多くのことは学ばないだろう、とあり、後のパラグラフで、中学から英語を学ぶ生徒にすぐに追いつかれてしまう…小学校でできることは時間の無駄…、とあるので、早い時期、は小学校でのことであることが理解できる。上記の例では、このようなことは何も勘案されず、word by word の訳であるため、語数は少なくなっている (モデル

文=57語、テスト群の平均27.7語)が、正確な意味が伝えられていない。適正な語数を使用して意味の通る英文にする必要がある。

- ②**冠詞・複数形** 日本語にはない the, A (an), 複数形などは、日本人英語学習者は英文を書く際にあまり意識していない。冠詞や名詞の複数形の必要なところでも適切に表記されず、意味は考慮されていない。また、これらの適切な使用法がわからない場合は、多くはブランクという手段を取っていた。モデル文の a (an) の出現は (n=9) に対しテスト群の適正使用は平均で (n=1.40); the はモデル文 (n=9) - テスト群の平均 (n=1.16)、Pl. (複数形) は、モデル文 (n=6) - テスト群の平均 (n=2.88) であった。複数形の適切な使用に関しては、冠詞・単数形、a, the よりも平均値の成績が良かったが、ばらつきは大きく、標準偏差は (3.059) であった。
- ③**母語干渉、文法、語法** 母語干渉、文法、語法による問題では下記の例のような問題点が見られた。

外国語を早い時期に学ぶのは有利であるように思える

モデル文：～the earlier in one's life starting to learn a foreign language, the more advantageous it can be～

回答例：～It seems advantageous to learn foreign languages in early age～

上記の例のように、日本文中の「早い時期」を word by word で英語に移しているが、この英文の「in early age」では原文(日本文)の意味を正確には伝えられない。また、モデル文のように the+比較級、the+比較級の構文を使った回答例は1例もなく、文法、構文の知識が不足しているのか、たとえ知識としては持っていたとしてもその知識を使用する訓練不足によって適切な英文構成が十分にできていない、という問題が見られた。

日本人英語学習者があまり意識しない、冠詞、複数形などの基礎文法、および母語(日本語)に干渉されて適切な英文作成が阻害されている要因の調査であったが、日本人英語学習者のストラテジーは主として、日本語を word by word で英語に置き換えることであった。書き換えた英文の不自然さ、あるいは非文となる場合でもそれが理解できていないのは、英語の構造的知識不足が大きく影響していると考えられた。ライティングの指導において、日本語では明確に表記しないが、英語では表記しなければならない事柄を意識して英文を考えることが出来る指導が必要である。

4) 語法・ライティング研究の展望

英語語法研究は日本語を母語とする大学生に理解しやすく、実際の「英語学習の中で役に立つ」ことを目的に JACET SIG 語法研究会に参加して始めた。筆者が参加して以降に業績として出版された印刷物は、*動詞類義語の研究* (JACET SIG:2002)、*Phrasal Verbs in Action* (Macmillan Languagehouse:2004)、なるほど *English* ではそう言うのか (成美堂:2012) などがあるが、いずれも日本人大学生の英語学習の役に立つことを目的として研究されたものである。また個人研究としての *英語の類義語〔旅行〕* (喜田:1999) も観光を専攻する学生がこの類義語の意味、用法を具体的に理解できることを目指したものである。

またライティング研究では、日本人学生が英文を書く場合、どのような障害があるのかを調査し、母語（日本語）がどのように干渉するのか、その結果、彼らが英文を書くときにどのような困難があるのか、また、それを解決する方法の可能性は何か、を提供し、学生により明確な学習方法を提供することを目的としたものである。今後もこの基本的命題「日本人英語学習者の役に立つ」を観点として研究を進めたい。

V. 英語学習動機付けに関する研究

1) 喜田：2008 「英語学習者意識と英語能力の相関性に関する調査」

動機づけの研究では方向性として、Gardner and Lambert (2000) の総括的動機づけ (integrative) や、Deci (1975)、Ryan and Deci (2000) の内発的 (intrinsic)、外発的 (extrinsic) 動機づけがあり、その他、Dornyei (2001) などがある。また日本人学生を対象とした研究では廣森 (2005)、佐藤 (2006) 島村 (2001)、その他の多くの研究がある。しかしながら日本の大学の教育現場では、学部・学科により学生の英語能力、英語学習に対する態度、動機、は先行研究（特に欧米における先行研究）の中で対象として想定されている学習者、すなわち、英語習得が不可欠であったり、積極的に英語を習得したいと考えている学習者など、とは全く異なる学生が多数を占めている場合もある。新しく大学に入学してくる学生の大半は日本の中学、高校での英語の教科が英語学習経験のほとんどすべてであり、しかも彼らの英語学習の最も強い動機は高校、大学入試である。

このように日本人大学生の多くが欧米の先行研究で対象となっている英語学習者とは条件が大きく異なっている場合があり、有効な指導を行うにはそれぞれの学生の現況やニーズに適した実効性のある対処方法を模索する必要がある。

研究は日本人大学生（一年次生）を対象に、質問紙による5分類・12質問のアンケート：1) 英語学習の目的、2) 英語学習のための大学設備、人的資源の利用、3) 英語圏での滞在経験、4) 学習行動、5) 学習ストラテジーと、それと並行して英語の学力テストを行い、学力テスト結果との関連性を分散分析により検証した。

①英語学習の目的

「道具的動機づけ」と「総括的道義づけ」に関して分析した。複数の目的を持っているグループの学力が優位に高く、これらのグループに学力は、道具的動機づけ－統合的動機づけ、や外発的動機づけ－内発的動機づけの区別の差はみられず、むしろ、単位取得、外国人の友達作りなど、単一の消極的目的しか持たないグループとの間に有意な差が見られた。

②英語圏での滞在経験

短期語学研修参加経験（3週間～1か月）のグループが海外旅行、経験なしのグループと比較して学力が優位に高かった。しかし短期間の研修だけが成績を上げている要因とは考えにくい。むしろ研修により、学生の英語学習に対する意識を刺激し、研修終了後、帰国してからモチベーションを高く持ち、学習を継続した結果であると考えられた。

③学習行動

自主学習時間が長いグループの平均点が、短いグループより高いことを示したが、グループ間

の分散分析ではその有意差が見られなかった。しかし、過去3年間の英語資格試験の受験回数の間には有意差が見られ、特に、受験回数4回以上のグループは他のグループと比較して、学力が優位に高くなっていた。さらに英検2級以上やTOEIC、TOEFLなど、日本人にとって難易度の高い資格試験を予定している学生は相当の努力が要求されるであろうし、2種類以上の受験を予定している学生は6か月以内という短い期間に複数の受験に対して準備しなければならず、学習に対するモチベーションを高く持ち続けていることが推測される。

2) 英語学習動機づけに関する研究の展望

動機づけには、道具的に対して総括的、内発的に対して外発的動機づけがあり、これまでの研究では、どの動機づけが学力（英語力）をより向上させているのかを調査した。しかし、これらの調査はより多くの種類の環境、多様な調査対象、多様な調査方法を重ねる必要がある。これからの展望としては、ある特定の環境に置かれた学生、例えば大学（学生がその大学の学生であることにプライドを持っているか、否か）専攻、卒業後の進路、等の多様な条件下で調査し、全体としてではなく、その環境下にある学生がどのような学習動機であれば最も英語学習に意欲を燃やし学力を効率的に上げることが出来るのか等、定性研究からの調査を行いたい。また、学習の過程、行動そのものが学習者の福祉、すなわち pleasure² となり、楽しくて、幸せな気持ちで英語学習を行い、英語力を向上させる内発的動機づけが最も重要なことである、と筆者は考えている。楽しく時間を使うのであれば、集中力も上がり、学習そのものを行う意欲が高まり、したがって、長期にわたり学習を継続することが可能になる。このような内発的動機づけを行うには何が必要であり、また効率的であるか、などの研究も行っていきたい。

[注]

1. 喜田以外の資料は孫引きとなるので、喜田の論文、著書を参照。例えば、喜田：2003に言及して、ピンカー、の例を引いているが、喜田：2003を参照。
2. Harari, Yuval Noah (2011). *Sapiens a brief history of humankind*. London, Vintage Books (pp.122-123)
*Let us try to translate the most famous line of the American declaration of Independence into biological terms: We hold these truths to be self-evident, that all men are **created equal** that they are **endowed** by their **Creator** with certain **unalienable rights**, that among these are **life, liberty, and the pursuit of happiness**. ... So 'life, liberty, and the pursuit of happiness' should be translated into 'life and the pursuit of pleasur.'*

[参考資料〈喜田の著書、論文〉]

- 喜田慶文 (1993) 『TOEFL 基礎英単語』 東京：旺文社
 同上 (1997) 『TOEFL リスニングテスト問題 350』 東京：旺文社
 高木道信、喜田慶文、他 (2000) 『同氏類義語の研究－日英比較の観点から』 JACET SIG
 矢田裕、喜田慶文、他 (2004) 『Phrasal Verbs in Action』 東京：マクミラン ランゲージハウス
 喜田慶文 (2006) 『TOEFL リスニングテスト問題 350』 (改訂版) 東京：旺文社
 喜田慶文、鈴木繁幸、他 (2012) 『なるほど！ English ではそう言うのか』 東京：成美堂
 喜田慶文 (2014) 『TOEFL リスニングテスト問題 190』 (4訂版) 東京：旺文社

論文

- 喜田慶文 (1996) 『英語聞き取り能力と読解力の差異に関する一考察』 東洋大学短期大学紀要 第 28 号
- 同上 (1997) 『英語読解能力に関する一考察－文法力、語彙力との相関性において』 東洋大学短期大学紀要 第 29 号
- 同上 (1998) 『類義語 SEEM APPEAR LOOK SOUND について』 東洋大学短期大学紀要 第 30 号
- 同上 (1999) 『英語の類義語「旅行」の定義について』 東洋大学短期大学 観光産業 第 16 号
- 同上 (2000) 『英文接続について－学生の使用する because, so, and, but に関して』 東洋大学短期大学紀要第 32 号
- 同上 (2000) 『観光英語ターム研究』 東洋大学短期大学 観光産業 第 17 号
- 同上 (2002) 『英語の短文、長文聞き取りにおけるスキルの相違に関して』 東洋大学国際地域学部 観光学研究 第 1 号
- 同上 (2003) 『外国語としての英語リーディング能力に関する一考察』 東洋大学紀要 「言語と文化」第 3 号
- 同上 (2003) -2 『外国語としての英語懲戒能力及びその能力向上方法に関する研究－対話場面の状況に関する情報が英文聴解力に与える効果に関して－』 東洋大学国際地域学部 観光学研究 第 2 号
- 同上 (2004) 『ディクテーションのリスニング技能向上に及ぼす効果について』 東洋大学国際地域学部 観光学研究 第 3 号
- 同上 (2004) -2 『英語リスニング技能開発プログラムの調査・実験』 東洋大学紀要 「言語と文化」第 4 号
- 同上 (2005) 『日本人英語学習者の英語聞き取り能力に関する一考察－短文聞き取りにおける調査から－』 東洋大学国際地域学部 観光学研究 第 4 号
- 同上 (2007) 『日本人学生の英語聞き取り能力とリーディング能力について－その相関性と問題点について』 東洋大学国際地域学部 観光学研究 第 6 号
- 同上 (2008) 『英語学習意識と英語能力の相関性に関する調査－観光系学生の英語能力と動機づけに関する事例研究－』 東洋大学国際地域学部 観光学研究 第 7 号
- 同上 (2009) 『日本人学生の英語音声認識・意味理解の方法に関する一考察－リスニングストラテジー使用の観点から－』 東洋大学国際地域学部 観光学研究 第 8 号
- 同上 (2010) 『英語リスニング指導法としてのディクテーションの有効性に関する一考察－ディクテーションは TOEFL Listening 学習に有効か－』 東洋大学国際地域学部 観光学研究 第 9 号
- 同上 (2013) 『日本人学生の英語リスニング能力に関する一考察－語彙能力との関係について－』 東洋大学国際地域学部 観光学研究 第 12 号
- 同上 (2015) 『英語音声聞き取りと意味理解に関する一考察－観光通訳技法受講生の用いるストラテジーから－』 東洋大学国際地域学部 観光学研究 第 14 号
- 同上 (2016) 『日本人学生の英語聞き取りに関する一考察－文の意味理解に必要な重要語句の聞き取りに関して－』 東洋大学国際地域学部 観光学研究 第 15 号
- 同上 (2017) 『日本人学生の英語作文能力に関する一考察－文法誤用と母語干渉の観点から－』 東洋大学国際地域学部 観光学研究 第 16 号